

畑中荷沢書誌〈華字著作編〉

——附、△翻刻▽『膝太問答』——

松野陽一

要旨 仙台藩の儒者畑中荷沢の漢文著作の書誌解題である。荷沢（通称多冲、名盛雄）は和漢兼作の人であり、近世中期の同藩の公的文業としての和文古典（源氏物語、勅撰和歌集、釈教歌）の注疏に成果を残している。その和文著作について別稿を作成（片野達郎編『日本文芸思潮論』平成3・3、角川書店所収）したが、その姉妹編として私的活動の所産である漢文著作について作成した書誌が本稿である。

畑中荷沢は仙台藩の儒者。名を盛雄（もりかつ）といい、太冲（多忠）を称し荷沢を号とした。安永・天明・寛政期に文事に活躍して、寛政九年（一七九七）六四歳で没した。通常儒者として知られるが、実は和漢兼作の人であり、むしろ和学の注疏に現在にしてなお評価できる成果を残した人であった。古今集ノ続後撰集の、十代の勅撰和歌集を対象にした『十代集釈義』『十代集要句部類』、源氏物語を対象にした『源氏彙事』『源氏彙言』などいずれも質量共に大作をものしているが、孰中、釈教歌を対象として伝典の中に体系づけて注釈を加えた『類題法文和歌集注解』二七巻は空前の渾身の業績で、類書が乏しいだけに、今後も釈教歌研究に活用されてゆくことなるう。これらの注疏は、いずれも伊達藩主重村に進献すべく執筆した書であり、伊達藩に於ては、公的文芸營為という点では、盛雄は（広橋兼胤門、日野資枝門の）和歌の人であり、歌道の人であつて、その漢学は、藩校の公的スタッフに関わらぬ、自由で私的な（折衷派の傾向をもつ）性格のものであつた。

ところが、その盛雄の和学に関する成果の全体像はほとんど知られていない。そこで先に、「畑中盛雄書誌（国学著作編）」（片野達郎氏退官記念論集『日本文芸思潮論』平成3 桜楓社所収）なる小稿を草したのであつたが、盛雄は本質的に和漢兼作の人であり、和・漢の業績一方だけの考察では全円的な評価は困難である。儒者と解説されても漢学上の業績も基本資料の整理すらなされていない現状であるところから、前稿と姉妹編の〈華字著作編〉を作成して、荷沢畑中盛雄の文学研究の基礎とすることとした。

安永六年三月の旅から生れた国字紀行『道の記』と華字紀行『東都紀行』（和歌と漢詩も対照される）や、公家宗匠との問答形式の歌論書『広橋卿（兼胤）江畑中盛雄歌道伺』と儒者細井平洲・南宮大湫との問答形式の学芸論『滕

大問答』の対照ばかりでなく、彼の創作した和歌・歌文(畑中盛雄歌集)と詩文(荷沢稿・荷沢雑著)は総合的に把握されねばなるまい。そして、それらの基盤の上に、前述した晩年の注疏の仕事が存在するのである。

従って本稿も前稿と合して初めて意義を有つことになる。併せ参照されたい。

なお、(二)詩論の『太冲詩規』『滕大問答』。(四)論の『貨殖論』は文そのものは漢字仮名混交の和文であるが、漢詩に關わる論と經濟論なので、参考までに〈華字著作編〉で扱った。

二

(一)漢詩

①荷沢稿

伝本は仙台叢書九所収の活字本が知られているが、同書に底本の明示は無く、また、現在までのところ他に写本等の存在は確認できていない。しかしながら、同叢書本の内容を検するに、整然とした構成と、比較的誤謬の少ない本文を有しており、後に掲げる(三)①荷沢雑著の清書本に成立を同じくする詩稿かその忠実な転写本が底本に用いられたかと推測するが、目下は確認することができない。国書総目録には、宮城県図書館に写本一冊と記し、近世漢学者著述目録大成に荷沢詩文集を掲出するが、共に検索することができなかった。

仙台叢書本によれば、五言絶三二首、五言排律五首、五言古三首、五言律八〇首、七言絶一〇五首、七言律一一九首、七言歌行一〇首、計三五四首の構成を有っている。

序や奥書等もなく成立は不詳で内部徴証に拠る他ないが、冒頭の「石奥勝游詩并叙」の序に「匏繫樊籠中四十年」の表現があり、当然伊達家出仕中の不遇の謂であるから、致仕直前の頃の作かと思われ、やはり集全体としては致仕

後の編かと推定される。交遊の人々との間で詠まれた作が多く、考証が進めば成立の手がかりが得られるかと思われるが、その能力を欠くことを遺憾とする。なお、奥田直輔の「墓碣」には文集・詩集を一括して扱ふ文意が見られる（文八十余編、詩三百五十余編）、文数・詩数の論拠はそれぞれ『荷沢雑著』『荷沢稿』にあると見られるので、寛政六年成立の明徴のある『荷沢雑著』に本書も近接して成立したと推測してもあながち誤まりともいえない。恐らく、生涯の和歌の集成である『盛雄詠藻』の成立も近い頃に想定してよいのであろう。

②連璧集

荷沢・青霞父子合詩集であり、孫達の手で文化一二年に仙台国分町流輝軒本屋治右衛門から板行された。宮城県図書館小西文庫蔵一冊本（九九〇・レ）に拠って略述する。従二一・三センチ、横一四・四センチの袋綴本で無地表紙。外題はなく、序題、柱に「連璧集」とあり、更に各詩集の扉中央に「荷沢集」「青霞集」とある。料紙は楮紙で三五丁、单边有界（内界縦一六・一センチ、横一二・四センチ）、每半葉序は七行一字、本文九行二字である。柱に「連璧集」と丁附。序は文化乙亥（一二年）孟夏、仙台南山積古梁、跋は文化甲戌（一一年）重五、外孫の岡珣のものがある。孫の滕千秋猷吉・岡珣双玉の校訂で、全部で一五六首、荷沢の場合、七六首が収録されている。

(二)詩論

①太冲詩規

日本詩話叢書（大正一一年文会堂書店、昭和四七年鳳出版復刊）第九卷に、芦洲池田四郎次郎の編で載っている。解題によると、八高教授藤塚鄰氏蔵本を底本にしたとのことであるが未見である。卷末に「天明四年四月 仙台 滕太冲」とあるから荷沢五一歳の作である。

内容は初心者向けの詩の作法を説いたもので、五七絶を中心とした論である。五言絶句権輿、五絶近体、五絶詩格、五絶結構、読_レ詩家書_一悪論_ト、同下、七言絶句権輿_並詩格、七言絶句結構、置_レ身開天論、不_レ読_レ書人能_レ詩論、貴_レ氣論、古人体裁論、下_二詩語論、起結論、著_レ題論、詩意論、論_三和輿唐詩の一七項。明快な論述で「身ヲ開元天宝ニオク工夫」(徂徠の説に拠っていよう)を薦め、それが詩作に条件の悪い日本の、特に東奥の地にあることを超え、一流の詩を詠出する理想の態度だとするのである。

なお、最末尾に「ナホ五律ヨリハジメテ諸体ノ句法ハ後ニ書クベク候」とあって、統編執筆をうかがわせるが、現時点では管見に及んでいない。

附、滕太問答

これも歌論の『盛雄問兼胤卿答』の場合に同じく、太冲が設問し、細井徳民と南宮弥六郎が答えているのであるから、厳密には徳民(平洲)・弥六郎(大湫)の論ということになるが、太冲の関心の所在を知ることができる点で、ここに記しておく。伝本は、宮城県図書館蔵写一冊(二二五・九)が確認し得る唯一の伝本である。

無地表紙左肩に子持ち野短冊を貼り、「滕太問答 全」と外題が墨書されている。縦二五・五センチ、横一六・二センチの袋綴本で、料紙は柱に「滕章堂」と刷られた楮紙を用い、墨付一九丁、そのうち第八丁オまでが平洲との問答、以下が大湫との問答である。双辺有界(内界縦二〇・五センチ、横一三・七センチ。界幅一・五センチ)每半葉九行。柱心の「滕章堂」は太冲の号か塾名でもあるのか。平洲問答の方の端作りは、翻刻本文に見られるように、内題は無く、本文から三字下りで二行に「問 滕太冲/対 井徳民」と記されている。徳民は平洲の名である。本文は一つ書きで、「一問」「一对」の如く漢字片仮名混り文で繰り返されるが、終末三項は問者答者が逆転して、「一甚三郎

問「一多中对曰」となっている。甚三郎は平洲の通称である。更に第五丁には問答終了後に加えたと見られる太沖の二行割細字注が五行にわたって記入されている。その他欄外頭注が三ヶ所見られる。また、第七丁から八丁にかけて、記述の順序の訂正記号の墨線と○印、「前」「後」の指定注がある。そして本文末に「右 五月廿一日ノ語録」とある。

大湫との問答は、直ぐ次行から始まり、見出しに「五月廿九日六月五日両度語録」とあり、次いで二行に「問畑中太沖ノ対南宮弥六郎」とあって、次行から本文に入り、平洲問答と同じ書式で「一問」「一对」の文となるが、途中から問答の逆転する部分も含めて、「一南宮曰」「一多忠曰」の書式が続き、多沖の細字注、頭注も前書と同様である。末尾には「六月五日夜 南宮弥六郎大湫ト」とあり、以下は料紙破損で読みとれない。五月廿九日と六月五日の分の区分は記述上からは判断できない。

さて、平洲問答の「五月廿一日」と大湫問答の「五月廿九日六月五日」の日付の関係であるが、大湫問答の方に「先日平洲へモ咄候通」として仙台龍宝寺の蔵書の内容が話題になっているところから、同年、それも前後半月程の近接した日時に両問答が行なわれたと見做して誤りないものと思われる。

また、平洲問答に「去年米沢ニ下リ候折」とあり、平洲が上杉膺山から招聘されて米沢に滞在したのが明和八年であるから、この問答の年は明和九年であったことが判明する。大湫問答の方でも「去年中、日本名家詩選ヲヨミ候」とあり、現存本では同詩集は安永四年刊本と寛政十年刊本しか確認できないが、序は明和八年であり、同年初刷り本が写本を見た可能性があり、傍証となる。明和九年夏五月末から六月初めに措定できる。

また、問答の場所は、平洲問答の平洲の言に見える「当分炎熱陋巷ニ候間、秋風生シ候ハバ、チト夜間御咄仕度候」の口調や、仙台を話題にして「御国元」という表現をとっていること、大湫問答では、太沖の言に「初日今日共ニ殊

ノ外馳走丁寧ニテ、御長屋へモ秋氣生ジ候ハバ……「罷帰申候」とあって、太冲が南宮宅を訪問していると知られることから、共に江戸の平洲宅・大湫宅での問答であったことが判明する。

細井平洲と南宮大湫はともに尾張の人、享保一三年(一七二八)の生れで、尾張藩儒中西淡淵を師とする同門、と共通点が多い。大湫が一八歳で江戸に出た時、先に来ていた平洲から生活面で援助を得たと大湫問答にあるから、相携えて勉学を共にした友人関係にあったといえる。が、官途では、平洲が尾張藩儒官となり、明和八年には米沢藩賓官として迎えられるなどの経歴を持つのに対し、大湫は諸侯に講説の機会が多かったらしい(大湫問答)が、生涯に ついに公の禄を得なかつたのであった。

太冲が面会した明和九年(一七七二)は両者四五歳(太冲は三九歳)、共に折衷派の儒者として脂の乗り切った時に当たっていた。

両者への質問事項はほぼ同一、拠って立つ学問的な立場から、朱子、仁斉、徂来説への態度、漢・唐諸注への見解、当代の江戸文壇への評価、講義テキストへの見解、読書の指針、そして逆に太冲への伊達藩文壇、詩文論についての質問などとなっている。当座の問答の記録を整理した形になっているが、両問答共、後からの太冲の見解が細注の形で挿入されており、その中では例えば、徂来・南郭への積極的评价などが見られ、本音と問答の中での意見には差のあることが知られる(この態度は和歌の場合の広橋兼胤卿との問答の場合に共通している)。

回答振りでは平洲の方がやや抽象的なのに対し、大湫は説の引用や儒家評など具体的で、その分だけ対話もはずみ、江戸・仙台の話題にとどまらず、京の江村北海、彦根の龍草廬に及んで面白い。太冲の学問観の基本がうかがえる資料であると同時に、平洲・大湫の資料ともなるので、後に附録として本文翻刻をすることとした。

(三) 散文

① 荷沢雑著

伝本は

(ア) 国立国会図書館蔵写二冊本 (一九一・六三〇)

(イ) 宮城県図書館蔵写一冊本 (九九〇・カ三)

の二冊がある。(ア)は恐らく荷沢門弟複数による楷書の清書本。(イ)は外題に「自筆稿」とあるが、他筆による写本である。

(ア)は縦二五・八センチ、横一七・一センチの袋綴本で、縹無地表紙(現状は国会図書館の補修表紙を重ねる)、左肩題簽に「荷沢雑著 乾(坤)」と外題。本文料紙は楮紙で、双辺有界、每半葉一三行二字、内界縦一九・〇センチ、横一三・五センチ、墨付一一四丁(内、序一丁、目録五丁)。楷書で精写されている。内題も「荷沢雑著」、寛政甲寅(六年)春の源信通の序がある。奥書はなく、印記は朱長方印「飯川氏/圖書印」が巻頭の右上隅に捺されている。

(イ)は縦二六・三センチ、横一七・一センチの袋綴本で無地表紙、左肩後補子持ち野題簽に「荷沢雑著自筆稿全」の外題がある。本文料紙は楮紙(反故裏もかなり用いている)で墨付一〇三丁、一面一一行書きだが、全体に草稿風でやや乱雑な印象を受ける書きぶりである。内題は「荷沢雑著仙台藤太沖卿著」。序、目録は無く、五ヶ所に大きな脱文、落丁があり、(ア)と比すと、一五項少く(欠脱のものも含むか)、特に下巻部分の配列順に大きな異同がある(後記構成参照)。書写奥書はないが、昭和二九年常盤秀五郎の荷沢自筆本に非ざる由の識語が巻末に見られる。印記は朱丸印「佐沢氏」など三種(除図書館公印)。(ア)本が善本たることは歴然としている。

(ア)アの序(第一丁オ。一三行)を引く。

陸奥者古鎮府之地也。中葉建國伊達氏世襲封而居仙臺城。号稱大藩、土壤衍博、氏俗淳厚、金華降景、福神釜貯、靈液秀氣之所、鐘雄偉傑俊之士往々。於其中藤太冲者仙臺儒学也。夙勵志文學、博問宏識、誕有聲譽、僚友猪謙宜者謁刺余、有年一日持太冲所著詩文若干来、視余且曰、欲梓以公同好請幸賜一言、以發華首簡、余不敏曷當其需、余竊調、凡物必有所由来、美惡之材因焉、馬之於大宛、象之於桂林、准橘谷梨、楚楠衡樟、皆然、培塿不植松柏、河濱不容鱸鰓、人之生豈亦有他乎、今大藩之出人村何止宛馬桂象乎、矧余於伊達氏、有爪葛之親其得俊士、豈不稱贊若夫巨匠雲構輪奐之美、不俟具論余豈可復弄斧班門乎、姑書此言、以與備猪謙宜云

寛政甲寅季春

源信通

伊達家連歌師猪苗代謙宜に依頼されてこの序を執筆した由を述べたものである。謙宜は刊行を口にしたようだが、結局実現には至らず、この清書本が残ったものと思われる。

構成を目録によって示し、併せて宮城本の欠脱状況を下段に記す。○印は同文が存在すること、×印は欠くこと。△印は一部脱文のあることを示す。下巻見出し項目下の洋数字は宮城本の配列順である。

上巻

(1) 序

① 寿公族白河生序

○

② 寿周翁八十序

○

③ 二伝略抄序

○

④ 燕沢碑考序

× ↑ ⑬ △ 脱文首六十字。

⑤ 桂州遺稿序

○

- ⑥ 同代某父知明序 ○
- ⑦ 塩浦文六母七十寿詩序 ○
- ⑧ 傷寒論弁抄序 ○
- ⑨ 職方外紀後序 ○
- ⑩ 金龍生十釣函詩序 ○
- ⑪ 臥遊稿序 ○
- ⑫ 送中大美之磐城温泉序 ○
- ⑬ 蓋珠余榜序 ○
- ⑭ 送源子敬之東都序 ○
- ⑮ 東谷文集叙 ○
- ⑯ 詩規序 ○
- ⑰ 坪碑帖序 ×
- ⑱ 短歌国字訳序 △↓④の個所へ、
- ⑲ 句台集序 ×
- ⑳ 贈岡伯仁序 ×
- ㉑ 送棋客序 ×
- ㉒ 詩規序 (⑯と同文重複)

(2) 記

畑中荷沢書誌〈華字著作編〉(松野)

- | | |
|------------|---|
| ③⑨ 田行尚字説 | ○ |
| ③⑧ 膝信庸字説 | ○ |
| ③⑦ 膝春信字説 | ○ |
| ③⑥ 沼直博字説 | ○ |
| ③⑤ 不二庵説 | ○ |
| (3)説 | |
| ③④ 採薇記 | ○ |
| ③③ 読書燈記 | ○ |
| ③② 琴台記 | ○ |
| ③① 子昂画記 | ○ |
| ③① 花瓶記 | ○ |
| ②⑨ 丘氏孤松記 | ○ |
| ②⑧ 金華樓記 | ○ |
| ②⑦ 錦川亭記 | × |
| ②⑥ 游鹿門記 | × |
| ②⑤ 朝陽堂記 | × |
| ②④ 鎮守府印記 | ○ |
| ②③ 萬勝岡一致亭記 | ○ |

④ 鏡研說

④ 桔槔說

④ 筍說

④ 書說

④ 三世館說

④ 鮑鸞說

④ 玄玄舍誌

下卷

(4) 書牘 (8)

④ 答或問案書

④ 答源子謙書

④ 答中奇石論文書

④ 与源東江

④ 答禪柱師

④ 与丹子亮

④ 与友人游長崎牘

④ 答高子亮

(5) 策試私擬 (9)

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

- ⑤⑤ 対問道義策 ○
- ⑤⑥ 擬对斉王融第四策門 ○
- ⑤⑦ 対論學術策 ○
- ⑤⑧ 擬漢武帝策 ○
- ⑤⑨ 食貸策 ×
- (6) 跋引 (5)
- ⑥⑩ 美人闘草図跋 ○
- ⑥⑪ 寧一山雄島碑帖跋 ○
- ⑥⑫ 夢鷹詩引 ○
- ⑥⑬ 書経会業引 ○
- ⑥⑭ 元日賜宴致語 ○
- (7) 碑碣 (6)
- ⑥⑮ 飯塚君碣 ○
- ⑥⑯ 般城先主碑 ○
- ⑥⑰ 道全居士碣 ○
- ⑥⑱ 中目孺人墓碣 ○
- ⑥⑲ 鈴孺人墓碑 ○
- ⑦⑰ 曲肱居士碣 ○

- ⑦ 露計翁碑 ○
- ⑦ 源伯機墓碣 ○
- ⑦ 箕水道人墓碣 ○
- ⑦ 長宜碣 △脱文末尾四十字
- ⑦ 安居土墓碑 ×
- (8) 祭文 (7)
- ⑦ 祭穀城先生文 ○
- ⑦ 祭謝太伝文 ○
- (9) 記事 (1)
- ⑦ 記曾我氏復讐事 △脱文末尾十八行
- ⑦ 記長谷観音事 △脱文首四十字
- (10) 伝 (2)
- ⑦ 妓王小伝 ○
- (11) 論 (3)
- ⑦ 楠判官論 ○
- ⑦ 汲黯論 ○
- (12) 賛銘 (4)
- ⑦ 太公釣渭図賛并序 ○

⑧4 繡観音賛	○
⑧5 几賛	○
⑧6 孫真人金像賛	○
⑧7 蕭相国賛	○
⑧8 張仲景賛	○
⑧9 自鳴鐘并序	○
⑨0 筆塚銘并序	○
⑨1 寿老人賛	○
⑨2 陶淵明琴書賛	○
⑨3 大底師研鑄松竹亀鶴梅	×
△一行空白▽	
⑨4 東都紀行	×
⑨5 東都途中雜詩十四首	×

(ア)国会本の場合、⑩⑫の「詩規序」の重複や末尾の⑨⑤紀行の追加に見られる処理の仕方など、編集整理の行き届いていない点は見られるが、(イ)宮城本の収録文は全て採っていて、国会本の方に欠けている文は無いこと、宮城本に欠ける文は、(1)⑩⑫、(3)④⑥、(5)⑤⑨、(7)⑦⑨、(12)⑬⑭、⑮⑯の如く、各部門の末尾に位置し、増補された可能性が強いことなどから、(ア)が原型なのではなく、編集の最終段階の姿と考えてよからう。

宮城本は、⑩⑭⑮⑯の如き首もしくは尾部を欠く場合はかならず改丁に当る部分であるから、本来は存在しながら

落丁したことがわかり、現在全文を欠いていて国会本に見えるものが存在した可能性もっている。しかし、国会本に存して宮城本で欠く文は一三に上り、全てを落丁・脱文とは考え難いこと、前記の如く、そのうちのかなりの文が各部門の末尾に位置すること、配列の点で、祭文・記事・伝・論の如き文数の少い部門が後半に位置し、短文の讃銘が最後にくる国会本の方が整理された印象をもつこと（無論、㉔㉕の紀行十詩は最終的増補と見るわけである）、などから、宮城本は国会本よりも成立過程の上で早い段階に属する伝本と考えたい。

盛雄生存中の寛政六年の序をもつことから、国会本の原型は自撰本であろうこと、書写者が複数であり、欄外注記や貼紙など本文異同や文意不明の指摘のあることから、現状の国会本は恐らく盛雄没後の門弟達による清書本という推定をおきたい。

なお、『近世漢学者著述目録』には『荷沢詩文集』の書名が見られる。これはあるいは、『荷沢稿』と本書が合冊された形態の本が在ったことを示すものかもしれない。本書成立の寛政六年は荷沢六一歳。『畑中盛雄歌集』を併せて、生涯に作した和歌・漢詩・文集大成する時期に当たっていたものと思われるからである。

②東都紀行

伝本は

(ア)国会図書館蔵『荷沢雜著』所収本文

(イ)宮城県図書館伊達文庫蔵写一冊本（KD二九〇・キ一）

(ウ)宮城県図書館仙台文庫旧蔵写一冊本（KD二九〇・キ一―二）

の三本である。(ア)は、①『荷沢雜著』末尾の㉔九丁分と㉕三丁分。前述の如く清書本で信頼するに足る本文を有つ。

紀行文末尾の「安永六歳四月廿二日 烟中多忠藤原盛雄」の記は有るが、(1)本の奥書はない。

宮城県図書館には二本在るが、(2)仙台文庫本は(1)伊達文庫本の複本として新写されたものと見られるが、(1)には大きな虫損があつて本文に解読不能部分が多く、(2)は(1)の虫損以前の段階の写本と思われる。

(1)は縦二八・六センチ、横一九・九センチの袋綴本で、白地に緑の小菊唐草文様の表紙左肩に、後人の打つつけ書きの「紀行 烟中盛雄」の外題が見られる。本文料紙は楮紙で墨付二三丁(紀行本文一九丁、東都途中雜詩四丁)、遊紙後一丁、本文は一〇行に書かれている(訓点が付されている)。料紙は上部小口側に大きな虫損、破れが表から裏まで貫通しており、本文に判読不能部分がある。なお綴糸は補修されたものである。序はなく、本文末に「安永六歳四月廿二日 烟中多忠藤原盛雄」とあり、丁を更めて、次の著者識語がある。

国字紀行本月初七始属_レ薬。十有_二日卒業、重有_三刪定之命_一、十有_二七日記竟。華字紀行十有八日甫_レ役、廿有二日脱薬、若途中雜詩点_レ檢未_レ畢、以_レ是_二不能_三副上_一、稽留之臯謂之何云

即ち、前記和文の「道の記」執筆終了後、四月一八日から本書の執筆にかかり、二二日に脱稿したが、詩の点検が終らず、和文紀行本文に副えて藩主に進上出来ず、手許に留める罪を何ともし難いの謂である。「不能副上」を「華字紀行本文のみ進上して詩は別に手許に留めた」とも解せるが、和文の、旅の途次の場所々々と和歌を挿入して感懐を盛る伝統的紀行の表現形態に比して、真字紀行の、詩を一括して本文の後にまとめるのは、散文と詩を個別に鑑賞する表現形態であり、それだけ本来的に分離し易い性格があることから、作者自身の詩への評価(不満足さ)から、その解の余地があるにしても、やはり一具一連の作として充分な推稿が未了のため、漢文旅行記は全体として控えた_レと解しておきたい。和字紀行が流布しているのに、華字の方の伝本が極めて少いことの理由もそこに求めておきたい。

なお、(ウ)には「仙台文庫」印が捺されている。

(ア)は全体が清書本の一部として、当然精写されているが、本紀行文・詩に関する限りでは、校合の結果では(イ)の本文が優位にあることを指摘しておこう。

巻末に付載される「東都途中雑詩」は、(イ)の場合には更めて「畑中多忠藤原盛雄」と表記され(ア)には無い)、次いで次の一五首が列記される形をとっている(つまり、散文と詩の二作品の形をとるわけである。この点でも(ア)より(イ)が原型の姿を残していると見てよからう)。

太白山歌地在長町有 桃花町 早行 千載山在金瀬 白石嵩歌 越河関 月輪館覽古地有桑折 高倉駅雨中口号 経須
箇河古戰場 白河関 給水 富士 鬘髮山 小金井 日本橋

いずれにせよ、和文・漢文の紀行は一具一連の作品であり、併せて検討、鑑賞されてゆく必要があろう。

この旅の直後に交渉が始まったと見られる細井平洲には、明和八年八月の米沢から仙台松島への往復の旅行記、漢文の『遊松島記』、和文の『をしまのとまや』(仙台叢書六に両書所収)が在る。上杉鷹山に一年間米沢に招かれた折の作で、これも漢文旅行記の後に漢詩がまとめられ、和歌は和文の各条に填めこまれて、表現形態は盛雄の場合と同一である。両者が出逢う以前から読んでいて、影響関係があったと見るべきか否か。後考を俟ちたい。

四 論

①貨殖論(経済秘録)

伝本は、

(ア)福島県立図書館蔵『貨殖論』写一冊(三三〇・二二)

(イ)宮城県図書館蔵『貨殖弁』写一冊(KM〇九〇一カ七)天保一一写

(ロ)同『経済秘録』写一冊(KM〇九〇・ケ三)漢字平仮名混り文

(ハ)仙台叢書一所収『経済秘録』

(ニ)日本経済叢書一一『貨殖論』(大正四刊同刊行会)

(ホ)日本経済大典一七『貨殖論』(昭和三刊。昭和四三復刊 明治文献)

(ヘ)『貨殖弁』(昭和七刊。大阪青葉倶楽部)

国書総目録の京大本は未見である。仙台叢書本は、巻末に「天明三年四月六日 畑中多忠」と一行に記すが、福島本は

畑中多仲

天明三年四月六日

阿部清右衛門様

と三行書きし、書き与えた人物を明記している。更にその後

右本書ヨリハ詞ヲ略シ写取候由佐藤某ノ断リ書ニ有リ、予ハ夫ニ以テ写耳ト志村時敏ノ跋アリ嘉永四年正月晦日とあり、伝本がかなり存在したことをうかがわせる記述となっている。

貨殖を仁義の道に則るものとして肯定的に捉え、国家経営のためにも、士大夫の倫理のためにも有用のものとして考へべきことを論じた書である。荷沢の文芸観を考へる場合にも配慮すべき論書たることは論を俟たない。

本書の宛先の阿部清右衛門は、統世臣家譜によれば、安倍氏。名を庸章といい、元は石巻の商人で相沢屋の二男であったが、仙台の商人安倍松庸の義弟となり、仙台府下の商人となった。度々の藩費欠乏に際して納金し、安永四年

士分となり、天明元年には広間番士として百七十七石五斗を禄すようになった。本書を送られた天明三年四月六日から四ヶ月後の八月には「物置金之事」に与り、尽力の結果を認められて白晒一匹を下賜されている。つまり、商人から藩の財務担当官となって功績をあげた時期に本書が送られているわけである。藩財政担当者にとって、貨殖を儒教倫理から積極的に肯定する本書の内容は、力強い支援となったことであろう。なお、庸章はこの四年後に病を得て辞任している。

三

以上が現在までに管見に及んだ畑中荷沢の華字著作の全てである。岳父芦東山や女儒として知られた妻姫に関連する資料や江戸詩壇などの各種撰集などに見落している資料は少からず存在するかと思うが、一まずの基本的な整理として今後補訂して行きたい。また、林笠翁の『儀式徴(初稿)』(東北大学図書館猪野文庫蔵由比本)の跋に見られる、『儀式徴』の書名を太沖の意見を容れて『儀式考』と変えたという例の如きエピソードの類もまだまだ多かろうと思う。これも追々補足したい。

荷沢の華字著作の中では主要作品である『荷沢雑著』が活字化されていないほか、個々の作品では『東都紀行・東都途中雑詩』、また江戸文壇との関係や儒者としての立場を鮮明に打出している『膝太問答』などが未翻刻で作品に接し難かったことが、従来荷沢への関心を大きくさせなかった原因になっていると思われる。そこで本稿では、ひとまず『膝太問答』を附録として翻刻し、その一歩を進めておくこととしたい。

同書の翻刻を許可された宮城県図書館を初め、資料調査に際してお世話になった各図書館、萱場健之氏、阿部千春氏に対して謝意を表す。なお、本稿は平成二年度科学研究補助金(一般研究C)の研究成果の一部である。

畑中荷沢書誌<華字著作編>(松野)

関係年表 *各欄洋数字は月。()は年令。

	年令	盛雄・家族	和文事項	漢文事項	備考
享保19	1	生、父健得母不詳			
延享2	12			君命デ『墳史』校訂ニ参加	
3	13		5. 父ト『新類題集』撰		
寛延2	16		3. 君命デ猪苗代兼恵ニ通歌ヲ学ブ		
宝暦元	18		6. 『初学千句』◎父ノ积教歌部類ニ助力		
3	20		9. 1. 父ト『両吟千句』		
6	23				6. 伊達宗村薨(39)、7. 重村襲封
明和元	31	長子忠英生(母妮)			
2	32		『野山の風』(笠翁家集)撰		
3	33	岳父芦東山没(70)		11. 28. 『食貨策』対	
5	35	3. 父健得没(85)			春『霞閑集』初撰本(広通)成
6	36	11. 妻妮没(33)			
8	38				細井平洲米沢藩ニ招カル『遊松島記』『をじまのとまや』
9	39			5. 6. 『膝太問答』	
安永6	44	2. 小姓組, 3. 江戸赴任	4. 10. 『道の記』君命デ広橋兼胤ニ入門	4. 22. 『東都紀行』	
7	45		7. 「雪月花歌合」(村由判)出詠		

	年令	盛雄・家族	和文事項	漢文事項	備考
安永 8	46		2. 『すみだ河日記』付書執筆, コレ以前『盛雄問兼胤答』成		
9	47				石野広通「大崎のつつじ」
天明元	48		コレ以後, 風早公雄ニ入門	2. 「不二庵説」	8. 広橋兼胤墓(67)
3	50			4. 『貨殖論』(經濟秘録) 安倍清右衛門宛	安倍清右衛門伊達藩財政再建ニ活躍
4	51			4. 『太沖詩規』	
7	54		コレ以後日野資枝ニ入門	2. 「塩釜文六母七十賀詩歌集序」	5. 風早公雄墓(67)
8	55		11. 『類題法文和歌集注解』下命		
寛政 2	57	6. 致仕	3. 『類題法文和歌集注解』成	11. 「擬漢武帝策」	
			コレ以後カ『盛雄詠藻』撰		
4	59		5. 『十代集積義』序		
			コノ頃『十代集要句部類』		
			コノ頃カ『源氏彙事』『源氏彙言』		
5	60	再ビ小姓組(一説)			
6	61			『荷沢雑著』(散文) 成	4. 重村墓(55)
				コノ頃カ『荷沢稿』(詩集)	
9	64	11. 20. 没。墓江敵寺			
文化12				『連璧集』(荷沢・青霞)	

〔付記〕 『太沖詩規』(日本詩話叢書) 底本の所蔵者藤塚郷氏について後藤重郎氏を通じて尾崎知光氏からの示教をいただいた。それによると、藤塚氏は八高には明治四二年から大正一五年まで在職、「中山高陽と藤塚式部」(書苑五―一二 昭16)、「林子平と藤塚式部」(大東文化一〇三、一〇六 昭18)の論のあるところから、塩釜神社の神官で国学者であった藤塚式部の子孫と推察されることである。さすれば、仙台藩儒の詩論書が伝存するのも極めて自然である。現存の有無を含めて今後確認につとめたい。両氏に感謝申あげたい。

附『滕太問答』(翻刻)

本書の書誌は前記項目の如くだが、翻刻に当っては次の原則に従った。即ち、漢字は常用漢字、仮名は片仮名を原則とした。「ム」「ル」「メ」などは「ヨリ」「トモ」「シテ」と開いたが、頻出する「候得共」「ニ而」や仮名遣いの誤り、若干混じている平仮名、オドリ点、ルビは表記通りとした。また、読解の便宜から、句読点、濁点を打ち、明らかな宛字な難読字には傍に「」で私解を示した。

太沖が問答終了後に記入した二行割細字注や頭注は、二字下げで「」で本行として挿入した。

滕太問答(外題)

問 滕太沖

対 井徳民

一問 足下学問ノ筋何様ノ目当何様ノ書ニ從レ候ヤ。

一対 先王孔子ノ道ノ外無之。書ハ六経論孟荀ナドニシタガイ申候。

一問 当時朱子仁斉徂来ナドガ説ハハリ候。此内何レニ從ガハレ候ヤ。

一対 徂来ヨリハジメ、イヅレニモ純一ニ從不申、ヨキ処ヲ取候内ニ徂来ガ方古ニチカク候間、此ヲトリ申候得共、トカク泥ミ不申、流メダ、ヌ様ニ仕候。

一問 左候得、バ、足下了簡兎角漢唐諸注家ノ説ト見得候間、十三經注疏ナドトクト吟味ナド可致事ニ可有之候。其内ニモ、孔叢子ニ云ゴトク、孔子ノ語ニ聖人ノ道ハ詩書ニ始リ礼楽ニ終ルト候得、バ、詩經書經ナド團一ト了簡可申候哉。如何。

一対 其通り無相違候得共、中々十三經ナドヨク埒明候ト申事ナドハ無之候。幼年ノ頃詩經ヲ好ミ候間、子貢古伝ヲ取立吟味仕候斗ニ候。

一問 詩經ハ人情ニチカク学問ノ專一ニ候得共、勿論ニ候処、注家様々前漢ニハ有之候へ共、皆断絶、ワヅカモ蓑ガ伝ニ鄭玄カ箋ノコリ候ヲ、唐ノ学官タテ候ヲ当世用ヒ候。外ニ申公カ詩説候へ共、篇ノタテ様別段ニ候。子貢ガ古伝ヲ焦弱侯ガ書目ニテ見申候。其板行レハ、弊邦ニテモ兎輩トリアツカイ候へ共、我未見之候。御了簡ニハ毛氏申氏ナト、違事候哉。

一対 子貢ガ伝申氏ト似タル物ニ候。只今可懸御目候由ニ而、出シ為見候。□□クアヘテ此伝ヲトリテ候ニモ無之、申毛ニ氏ヲ廢ニモ無之、古キヲアツメタツトブ心ニテ候。

一問 御了簡勿論ニ候。朱氏ノ鄭ノ衛ヲ淫奔トシ、詩序ヲケヅリ候ナド思ヒ入有事候得共、チトスマヌ事モ候。如何御了簡候哉。

一対 至極蒲同妹ニ存候。不及委細候。

一問 書經ハ古文今文トモニオコナハレ候ヘドモ、明朝ニテモ此方ノ仁斉ナドモ古文ノ安国伝を偽書ノ様ニ申候。ナ

ルホド出候事ヲソク候故、ウタガヒ候モコトハリナガラ、余リナル事ニ候。イカゞ。

一対 是モ御同意ニ存候。トカク古経ハナキヨリアル方ガコトノ外ヨク候ヘバ、今古文書経重宝ニ奉存候。

一問 春秋伝ハアマタ候ヘ共、皆漢ニ絶申候。今ノ世ニハ左伝ハヤリ、兒童マデモテアソビ候。但シ、経義ニヲキテハ左伝ニテモ一通リスミ候ヘトモ、公羊伝、教梁伝ト合セ見候ヘバ、雲泥トチガヒ候。此処愚見モ候ヘ共、先以御了簡尋入候。勿論、唐ノ説ニモ左氏ハ穩当、公穀ハ理屈ニ而ムヅカシク候由申候ヘ共、前漢ニテハ公穀ニテ政ヲサバキ、本朝ニテモ王代ハ公穀ノ博士ヲラカレ伝授アルモノニ候。理屈ハ但シ当世ヘアハヌ事三伝共ニ見得申候。

一対曰 先以春秋ノ左伝ニテサバキ申候外無之、中々三伝ヲシコナシサバキ候事ハ成カネ申候。一伝候ソレキリ候ニ、外了簡無御座候。勿論左伝モ後世ノ作、左丘明ニハ無之之由ナド申候。左様ナル所モ有之、又ハ格法今古トチカヒ候間、アハヌ事モ大分有之候。左様ニ折入専議モ不仕候。文章ノ用ノミニ世上用申候。

〔頭注。太冲カ〕

丘明カ作無之由ハ唐書□□スガ伝ニ出申候。但シ、后漢ノ□固孔穎達ナドハ丘明□□由申候。元来ニ説御座候。□□一候対モ此事ニ御座候。

一問 当世江戸ノ人物アマタ有之候事ニ候。サダメテ名士ノ内ニ、態沢了戒、荻生ソライ、太宰徳夫ナドホドノ情コハク偏ラシク候ヘ共、聖人ノ道ヲ見ツメ博物文章有之、一家ヲタテ候衆誰々ニ候哉。足下ナド此境ニハ有之マジク立ノボリ候了簡ト存候。承度候。

一対 中ニ徳夫ホドノ人物無之。私ナドヲハジメ皆々似タル者ニ候。其中ニ高下候斗ニ候。大カタ古経漢唐ニ從ヒ、宋以下ノ説ヲキライ、先王ノ道ニチカク物ヲ説候斗候。一家タテ、世ヲ風靡スル程ノ衆ハ無之候。

一問 足下大藩ノ諸侯カタヘ御出入一段ニ候。定而書物ヲ講^(マ)じ直ヲ指南可致申候。何ヲ先セラレ候哉。

一対 別ノ物モ無之候。前ニ申候六經論孟荀子ヲ学士ヘトキ候トハ別段候。一通治国平天ノ筋斗ヲ説申候。計訓ハ不仕候。

一問 聖人ノ詩書礼楽刑政ナド、申候三代ノカタヲ本ニ致シ、代々損益シテ、制作ハ聖ナラネバ、ナラズトモ其本ニモトラヌ様ニ治民ノ術ヲ致ス筋ニ見得候。高尺如何候。

〔頭注〕

此説昔ヨリ有事也。但シヨキ了簡ニ候。俗儒ハ及ビガタク御座候。トカク功ヲ□□御座候。

一対 左様ニハ候ヘ共、愚見ニハ近世モ荻生ナドモ礼楽ノ事トヤカク申候ヘ共、三代ノ礼楽モ当世ハ一向ニ無之可^吟申候。枉モ無之候間、愚見ニハ治民安国ノ種ハ孝悌忠信仁義ニ候ヘバ、是ヲトキテ女子小人マデモ耳チカク指南仕ル覚悟ニ候。諸侯方ヘモ此通りニラシヘラ施シ候。

一又問曰 御了簡古今大カタ左様ナル物ニ候。一段ヨク候。但シ、此事ニツキテハ人々了簡有之、一樣ニハ申候ガタク候。トカク無益ノ高遠ニハシリ理ニタラヌヤウニ〔致〕シテ今日ノ世上ヘ益アル事道ニチカ□候。

一対曰 左様ニ御座候。六論衍義ノ様ナル事ニテモ民サヘ合点スレバ能治リ申候。

〔以下太冲細字注。二行割〕

一右ノ申役、細井カ説ヨク御座候。一向ニ難無之世上通行ニ御座候。但シ、愚慮ハチト別ニ御座候。サリナガラケ損ノ事ハ一人々々了簡アルモノニテ、父子師弟トイヘドモ同ジ様ニ押ツケラレヌ物ニ御座候。其品ハイヅレノ説モ道ノ内ニハヅレヌ事ニテ、平穩ト精微ト違ヒ候斗故、人々ノ好ニマカセ申事候。ソレユヘ孔子モ太皿言各志ト仰ラレテ、諸門人存分出候ガ、顔子ガ妙言ヲホメ、子路ガ出ホフダイモ一笑シテ指ヲカレ候。子路ガ申様顔子ヨリ下リ候ヘ共、一格アル故ニ候。扱、細井ガ申様ヤハラカナル功者ノカ様昱ニテ、世上コニアヒ治民此上ナク

候。サリナガラコ、ニ□決御座候。ソレ故代々ノ唐名儒本朝ニテモ王代不及申候。近世モ惺窩仁斉了戒ナトノ如キ心法斗ノ学者モ、礼楽ヲ時ニ申候。徂来ナドハヒタト礼楽ヲサタ仕候。扱又此礼楽ト申モノナルホ(下)今世六三代ノ様ナル事ハ一向無之候。夏殷周ノ礼楽ハナシ。ソレヲスルヨリハ孝弟仁義斗ニテ、ヨシト見ル事、和漢トモニ無理ナラズ候。ヨリテ孟子モ堯舜ノ道ハ孝悌ノミ、又曰仁義アルノミナド、申テ、コレニテ治国スミ申候ニヘ、世ニ目ニモ見ヘヌ古ノ礼楽沙汰スルハ迂遠無用ノ様ニ存ラレ候。サレド礼楽ノ情サヤウノ物ニハ無之候。コトニ聖人ノ制作ノ本源ヲシラザレバ、大カタカヤウニ礼楽ヲ見ルモノニ候。ソレ故、今世礼楽ハ古礼楽ニ似不申候ヘトモ、扱又礼楽ハ礼楽ニ候。ヨリテ孔子モ、楽云楽云鐘鼓云乎哉、礼云礼云玉帛云乎哉ト有テ、礼楽ノ本ヲ述ラレ候。コレヲ万世ノ礼楽ヘワタリ、三代ノ礼楽ハナシ。吟味無用ト申ハ、礼楽ノ繁文促節ノアトヲ見テ申候。礼楽ノ意ハ一日ハナレテモ仁義孝弟ヲ行ヒ可候様無之。ソレニヘ漢儒ノ論語注ニ道ト申字ヲ大カタ礼楽ヲサスト注シ申候。扱、礼楽ヲ粗述コトヤトトミテ仁義孝弟ヲトキ候ヘバ、初メハヨク候ヘ共、後ニハ心法ニナリ、無術ニラチイリ候。宋元ノ一日ノ学风ナド此気味有之候。ヨリテ周ノ世ノ法詩礼楽ノ四術ヲタテ、学ヲシヘ候上ハ、大司徒ノ勞ヨリ役人ヲモウケ、五倫ヲ和グル術ヲバ又別段ニラシヘ候。コレ書經ノ舜ノ法ニ候。カヤウニ折入ヲシヘハ絶シタル事ニ見及申候。又礼楽ト申セバ、立居フルマヒ、膳ノアゲヲロシ、或ハ五常楽ノ越殿楽ノト、吹カ引カノ様ニ聞候得トモ、是モ左様ニ無之候。周礼ニ吉凶軍賓嘉ノ五礼ヲタテ候。コレヲ稽古スレバ、君子ノ地ニイタリテ、奉公モ政務モナルヤウニ致シ、易ニモ先王楽ヲツクリテサカリニ鬼神ニス、ムトモ有テ、時代ノ音□ヲ考エ楽ヲ相応ニコシラヘテ、目ニ見ヘヌ鬼神天地ヲモナクサムルヨリハジメ、人心ノト、コヲリヲクツロゲ、礼ト相互ニ車ノ兩輪ノ如クニ助ヲナス物ノヨシ、礼記楽記ナドニモ見ヘ候故、当世ノ小笠原武田流ノ礼、觀世々□ノ俗謡モ三代ヨリタメスガメテ見テ、其日用ナルヲ取用ル事、孔子ノ語ニモ叶ヒ、礼楽ノ遺風ト申モノ、ソノ上古礼楽

ヲコノム君上ヲハシマス時ハイカニモ和漢ノ古ニ立カヘリ、何祀モ礼楽ノ吟味出、ソレヨリスミカネヲアテ、孝弟仁義ヲ沙汰スレバ、三代ニチカク、術ノ手当有之、稽古致シ安ク見得候。只モノ仁義ノト申テモ、手段ノシカタナクテハ、行ヒ稽古ニ申様無之候。ソレユヘ聖人ノ礼楽刑政ハツケタルモノニテ、此処ニ利用厚生ト制作ト三段候ヘドモ、先以制作斗ニテ、此咄ハ相濟申候故、如此候。此上ニ礼楽ノ妙ニ至リテハ、陰陽變理ノ術ニイタリ候。此事周礼三公ノ条下ニ出候。勿論、礼記月令其外書經易等ニモ、皆々變理ヲトキ候。世ト申モノハ□太平ニ治メテモ、天地ノ氣ヲ治メ様シカト埒明不申候而、疫癘キキン大水大火ナト出テ、人種ウセ候得バ、治平ト申ガタク、ヨリテ三公ハ一向ノ無職黨、此陰陽斗ヲト、ノヘ候事、本役ニ候。コレ先王先王聖人ノ妙ニ御座候。本教モ御同前ノ御格ト見ヘ、淡海公ノ令職員ニモ、大政大臣ノ条下ヘ此事ヲノセヲカレ候。カヤウノ術ノ種ニハ、仁義孝弟、ト毎日カテモ埒明不申候。此下コシラヘノ大道具ハ礼楽ニ候。ヨリテ士以上ハ君上ノ御手伝ヲ仕リ、治民ニクハ、ルモノユヘ此礼楽ノ術ハ心得不申トモ、手段ノ咄斗モ一通修行仕ル事格別ニ候ユヘ、ソレヲトヤカク申事ニ候。モトヨリ礼楽ハ君子以上ノ事、民□カ女子小人ナトイヘバ、イツモヒラク孝弟ヲ教ル事、先王ノ定法ニ候。孔子モ民ハヨラシムベシ、シラシムベカラズト候モ、民義ニ候。又、礼記ニ礼ハ不下鹿人トモ御座候ユヘ、治国安民ノ法ヲ作ル。君子ト何モシラヌ民トヲ一牧ニ見ルヤウノワケニテハアシク候欤。此処差別アルベク候。但シ唐ニテモ中古ヨリ学風ニ士ヒ学問浪人学問御座候。大かた浪人学問ハ礼楽キラヒニテ、チヨット見ヘワタリヨロシキ筋斗申モノニ候ユヘ、人ギ、モヨク御座候。礼楽陰陽ノ事ナド沙汰致スハ一向埒モ明ズ、ヤクタイモナキ事ニ日ヲクラス様ニテ、人一向コノミ不申候ユヘ、甚三郎了簡ニアル不申候モ道理ニ候。サレバトテ、甚三郎了簡アシキニ無之候。当世ハ甚功者ナル治メカタノ筋、心得候者ニ見得申候。唐ニテモ名公ニ幾人モ此類ノ説申置候ユヘ、切瑳ニモ不及候。各ノ見ヲコレハ用ヒ候事、相定ル作法ニ奉存候。コノヤウニテモ一通リハ道ニ

モトル事無之候故、心中了簡不申違之道、不同不相為謀ト申類ニテ一通リツ、見ツメ置候処へ向ノ人見ツメヌ事ヲムサト論ジカケ候バ、益ナク候。折ヲ以論シ候へバ、氷ノトケ候ゴトクナル事モ御座候。勿論、戦国策ニモ、交浅而言深忘也ト申テ、出会頭ヨリメツタト論ジカケ候ハ、君子ノ以文会友友輔仁ノ教ニ反シ候様ニ奉存候間、先以サシヲキ申候。

〔頭注〕

此事朱子ノ小学内編ノ初ニモ委細出シヲカレ候。朱子ナド心法ニ近々最天下後世ヲ荷フホドノ大名儒ニ候マ、カヤウノ所ニハ油断無御座候。

一問 弊邦、足下先越シ候間、トカクハ心得ノ筋モ可有之候。元来田舎故、書物不自由ニ候。龍寶と申真言寺ニ蔵書有之。一切経、廿卷史、十三経、百三家集、冊府、丹鉛、儂確文敬ナドノ様ナル大部ノ書モ一通リ有之。サレドコレハフリハテ、虫ソクヒ残シタル様ニ世ニ思フモノ也。当世ノ新渡ノ唐本ナド無之候。江戸ハ人文ノ園藪、東壁図書府ニ候へバ、定而学問詩文ニヨキ新本沢山可有之候。何ト申テ讀テ益候哉。承見仕度候。

一対 御元大方相心得候。龍寶蔵書ソレホド候へバ、モハヤ書ハ外ニモトメ不申ヨク候。江戸モ新本ナド沢山アルベク候へ共、中々サヤウホドヨム人無之候。私ナド田舎ニオリ、弱年ノ比ヨミ候斗ニ候。一向ニ博物ニ無之候得共、日々門人参リアツカヒ候故、世上一□誉発し候モノニ候。御称美ニアヒ、様々御尋トモ古人ノ才士ニ比セラレ候事、行当赤面申候。江戸ハ全体書物ヨマレヌ所ニ候。ソノウへ都人士ノ油滑ノ風ニソミヤスク、シカトシタル事致シニク、但シ、ソレダケ名人モ候マ、折入候得バ、ヨキ事モアマタ御座候共、右之通大方沢山ハヨミ不申候。私モカヘッテ去年米沢へ下リ候折、ヨホド書ヲ讀申候。田舎ダケヒマ有之故ニ候。龍寶書目ノ外ナドニ、指当リ何書

ヲヨムベシナド、申事ハ無之候処ニ候。御会点ノ前ニ候。

一 甚三郎曰 詩文ハ当世皆々巧拙ヲ論候之処、トカク唐語ニナリテ後ノ巧拙ニテ、中々日本詩ノ内ニテハ詩文ト申ガタク候。大カタ文モ冗長ナルノミムカヨヲ長ク云奉ニテ、唐ナリ不申候。

一 多中对曰 此段別而御高見ニ候。私ナド平日小兒輩ヘモ言談候。トカク古文ハ短簡含蓄多ク候。マツシグラニ唐人様ニ語ヲ修行シテ後、文章ノツリアヒ沙汰スル事ニ候。コレハ徂来モ申、古人モ申置候テ、誰モシリタル様ノ事ナガラ自得ナケレ、バイハズ候。サスガ足下ハタケノ高見甚以御同意、此後弊邦ノ少兒共ニモ、足下ノ語徴トシ可言談候。詩文ハ詩文ヲシテ心得タル者ナラデハ深ク沙汰ナリ不申候。

一 甚三郎又曰、左様ニ御座候

一 問 詩文ノ事、此末段々御相談仕度候。今日ハ日モクレ扱々入り短霄ニ候ヘバ、學術ノ問モ是切ニ可仕候。足下ノ詩文十年前ヨリ嚶鳴館集見申候後、近領袖上可申候。追日心中ヲ論ジ申度候。御了簡可伺候。

一 對 御返奨引当候。当分炎蒸陋巷ニ候間、秋風生ジ候ハ、チト夜間御咄仕度候。私カネテ詩文拙ク候。嚶鳴館集モ私詩ヲ板ニ行ヒ申志モ無之、私玉山其外ノ名匠ノ評語候マ、ソレヲ世賞セ候為、板シ申候。此末私詩文モ出シ御相談ヲ仕度候。足下先日ノ二律ナド田舎ト申ガタク候。一段ヨロシク候。段々御著述拝見愚慮モ可申達候。

一 甚三郎曰 詩經古伝カシ可申由也。拙者辞曰、先日借り候玉山遺稿ヲ返スノ後、カリ可申候。此末難染□知交リ可言置申續候。同人モネンゴロニ評シ候。其後御国元塩竈ノ社官藤塚式部ト申モノト所ニ同人逗留、文雅ヲ仕リ、又ハ田辺良輔ナドニ逢候。咄ナド仕、其外雜談ニテ、夜ノ五時比罷帰候。以上。同人事温厚ノ生。質ニ候。

右 五月廿一日ノ語録。

五月廿九日 六月五日 兩度語録

問 烟中太冲

対 南宮弥六郎

一問 足下学問何ニヨラレ候哉

一対曰 私学問指サル事無之候。世上ニテハ漢唐宋儒ナド、噪キ候得共、皆浮歴ニテ自得無之事ハ用立不申候。私存入ハ学問ハ詩書ニハジマリ余経并論孟ナドニ留マリ候得バ、此間ヲ沙汰シ今日ノ用ニ立ガヨク候。勿論吟味手筋ハ漢唐ヨリ只今マデモ、先儒ノ説ヲエラビ用ヒ候得ハ、宋儒モ先達ニテ□随分沙汰シテヨキヲ取ル事ニ候可候。私ハ宋儒モ好ミトリ申候。

一問 申サル様スナラニテ一段ニ候。学問サヤウアル事ニ候。但シソレニツキテ或ハ礼楽ノ良知良能ノ理屈ノ仁義ノト、各ノ見タテ候筋アルモノニテ、先達モワレニヨリテ吟味申物ニ候。譬テ申サバ、聖人ノ道ハ完璧ノ八面玲瓏ナルヤウニ候処、道裂レテヨリコノカタ后世人ハヤウ々々一面ヅ、見タテ候事ニ候可候。荒唐^{ハット}先儒ノ説ノヨキハ皆トルト申ハナトヲサヘ処ナキヤウニ候。イカゞ。

一対曰 尤折入候高見難及事ニ候。サヤウニ吟味申ハ実ニ切問近思ノ第一ト称美ノ至ニ候。ナルホド仰ノ通ニ候。私義ニ仁義ノ筋ニ理ヲ加ヘ候。ソレヘ礼楽ヲモ相応ニ取付候得共、ムナシキ礼楽ハチト物遠クオボエ候。大方ハ古注家ノ説、理義ノ説ヲ取合セルト云ヤウナルモノニ落候。委細不及申候。私事^{外見ツクヒロヒラスル事ノ後漢書ノ字}辺幅ヲ修メテ人ニヲコル事第一嫌ヒニ候。口ヲ開テ心肝ノ見ユル様ニ生涯ヲタテ候間、私ヲ御見ヌキ御覽ノ通ト可被思召候。トカク申ハ外ヲカザルニ候。其元ノ御見識ニテ私程御心得ノ事ニ候可候。ソレニテ御沙汰可被成候。

一問 是又甚高見、古人モカタンスル事ニ候。実ニ辺幅ヲ修メ候ハ、イヤシキ事ニ候。目撃道存ト申テ、口舌ノ上ニ

テトヤカク申ハ実ハ學問ノ心門頂上ニハ無之、唯喏ノ間ニテ其人ヲ領解スル事專一ニ候。サレドカヤウニ申候得、
教ノ道絶候テ、老莊評家ナドニ落ノ間、古ヨリトカク口舌筆勢ノ上ノ沙汰モアル事ニ候。聖人ノ不言ノ教等ハノボ
リタル境ニ候得共、実ハ礼楽ノ化モコ、ニ存シ候。仰趣深ク予ガ心中ニ領解シ不及筆舌候。

一 対曰、扱々添候仰ラレヤウ実ニ古人風コ、ニアル事ニ候。足下モ実ニ辺幅ヲ修メヌ人ニ御座候。此後方寸ノ心中互
ニ可申述候。私ナド何ノ才モ無之、御益ニナリ候者ニモ無之候得共、太室、平洲ナド平日交候処、自身ノアヤマ
チアルガ、悪声ノ及ブ事アレバ、至極ニ助ケアヒ候、切嗟ハ油断無之候。足下モ此列ト可被思召候。心中ニサカヒ
ヲタテ候ハ物ハ申サレズ候。別而宜シキハ問ノ品々添候。

一 問、春秋三伝ノ事、此間平洲ヘモ沙汰申候処、埒明不申候。実ニ漢唐諸儒ノ手ニモ埒アカズ候間、勿論ニ候。但シ
高見候哉。イカゞ。

一 対 仰ノ通ニ候。埒アカヌ事ニ候。春秋五伝ト申テ、明ノ雙峯ノ鏡氏ガ撰者之候。先年吟味申候。ヨキ様ナル物ニ
候得共、折入見申候得ハ、一向ニヤクタ、ス候。一伝切りニ相応ニ沙汰スル外無之候。其上チト左伝ナドハ縦横家
ノヤウナル処モ見得候。真偽定メガタク候。

一 問 詩書ナドハ古訓ニ從ハレ候哉。

一 対 其通ノニ候。

一 問 □別而ムツカシク候。如何沙汰候哉。

一 対 王弼ヲ世上取用候得共、私ハ程伝ヲ取用ヒ候。

一 問 ナルホド王弼ハ至極候得共ヨミニク、程伝ハスミヤスク候。其上宋儒ノ説ナカラ、程氏ハ害ナク候。私ナト
易ノ取アツカヒ散々ニ而候ユヘ、一通ニヨミ候。以先爻ノ辞ヲ玩ビテ、字面ノ義理ヲ解シ、ソレニテ治国安民ノ手

筋ヲ取付ケ、其上ニテ六爻ノ消長ノ象ヲ論ジ、陰陽ノ變ヲ心得候。此外ニヨキ見識モ無之候。足下ナドイカゞ御覽候哉。大カタ易ノ見ヤウ繫辨ニツマビラカニテハ候得共、古言簡奥ニテムツカシク候。

一対 私トテモ左様ノ外無之候。

一問 礼ハ周礼儀礼カ本ニテ礼記ハ伝ノヨシ申候。其上周礼ハ偽書ナリ。書経ノ官ヘアハズ。其上王莽カ世ニ劉歆カ作レリトモイヒ、又唐太宗随王通ナドハ聖人ノホンノ書ナリトモ申候。イカゞ御了簡候哉。

一対 折入御タヅネ不残候。仰ノ通ニ候。真偽ハシバラクサシキ候。何ニテモ古書ニテシカモ道ノサバキ專一ノ物ニ候。周礼ノ考工記、儀礼ノ賓主、技見ノ様ナル文字ハ世ニ無之候。別而重宝ナル書ニ候。礼ハ尤雜簡ナルベク候。但シ仁齋ナドカヤウニ打ステ、ハアシク候。

〔以下乱丁、補訂〕

一問 諸侯方・諸大夫方ヘアマタ御越シ書御講ジノ由、珍重ニ候。何ヲ講ジラレ候哉

一対 大カタ詩書ニ候。其内ニ論孟モ有之候。孟ハ趙記ニ□中朱注一席有之候。私ハチト程朱スキニ候。

一問 足下ノ胸襟慮外ナガラ、当世ノ汚腐ノ儒態無之、風流灑落ナル処物ニカ、ハラズヨク候。ナルホド程朱モ取レ候段、勿論ニ候。私トテモ左様ナル物ニ候。コレヨリ私書物ナドヨミ候筋御咄可申候。私事共四五歳ヨリチトヅ、

四書五経ノ素読、又ハ史漢ナト読候処、一向スマス候。^(マ)勿論学流モ朱書外藩内ニスクナク候故、朱注ヲ見候処、理屈ムツカシク一向ニスマス、天下古今ノ治跡見ヒラキ無之候。トカク氣ノ毒ニ存候内、古訓ノ書共カリアツメ、段々ニ見候得バ、宋説ト違ヒスナラニズラノト埒明ムツカシキ手段ハ聖人ノ道ニ無之、誰モ合点ヤスキ事ニ候。コレ

ヨリ心付キ候マ、チトヅ、詩ナドヲモ作り候処、平仄モ不心得、イロハ韻ナド申愚昧至極ノ物ニ而、引具テ十首廿首作り、又ハ文章モ埒モナキ童子教実語教ノヤウナル物ノ程ニカキ候内、八大家李王ナドアル事ヲシリテ、ソレヲ

ヨミテ少々書ナレ候ノミニ候。ソレユヘ程朱ノ説モ心得候テ、二程全書朱子語類文集又ハ宋ノ諸公語録ヨリハジメ、朱書ニ入用ノ物モ一通リヨミ候。但シ支離^{ハナレ}ムツカシキ理屈ニハクタビレ候テコレヲ打ステ、先王ノ渾然トシテ手筋アル治国安民ノ学問ニトリ付候。其内程朱ノ説モ古先王礼楽ノ筋ニ叶ヒ候分ハ取用ヒ候。宋説皆アシトハ不申候。勿論程ヨリ朱子ハ拔群ノ豪キ孟子荀賈誼董子楊雄鄭公玄王通韓愈ガ外太刀打スル人無之候。サレド元明ニナリテ陳白沙ガヤウナルヤクタイナシトモ出来、道ヲ見損ジ一向ニ朱氏ニモ無之学風ヲタテ候ヲバ不同意ニ存候。

一対 仰ニテコト^ハク心中ヒラケ、御相談大分致シヨク候。私ナドモソノ様ナルモノニ候。幼年比師ヲトリ、書ヲヨミ候処、一向ニ覚ヘ不申候。老呵責セラレ発憤仕リ、自身ト四書ノ字引ヲ以テ書ヲヨミ習ヒ、ドウヤラコウヤラ埒明、十八歳ニテ平洲ト同シク東都ヘ罷出、金米モ無之、同人ヨリモラヒ候モチ米ヲ二月程朝夕ニ食ニ致シ苦学仕候。□□カホドニ成候。当時私門人ドモ御覽ノ通、大概ノ処^マ龍^コヲ申候。中々学問ナリ申マジク候。朱書ノ御サタ御同意ニ存候。

一問 徂来ガ学風一通大ハヤリニ候処、江戸モ今ハ大分ニ学問カワリ、徂来ヲナヤマス説多ク見エ候。弥左様候哉。私ナド同人ノ説モ大カタ一隅ヲアケテ三隅ヲ反スルヤウナルモノ、又ハ処ニ英雄人ヲアザムク処モ有之、其^マア^イハ合点ニ候。但シ、古訓ヲ見ヌキ先王ニチカク候吐モアマタ有之候。当時ノ人ムカシヲ心得候ハ同人ノ力ノヤウニ候。イカ。

一対 左様ニ候。今モ同人ニ沈湎、一向ニタハヒナキモ有之候。ナルホド復古ノ業、同人ノ力ニ候。乍去、無理ナル処モアマタ候。何ニツケ只今東都ハ名士ノキレモノニ候。此辺ニモヤクタイナキ学者トモ沢山ニ御座候。御藩内ナドイカガ候哉。承度候。勿論右之通ユエ江戸ニ而ハ中々学問ノ吟味埒明不申候。足下ナドハ藩内ニテ御沙汰候テ埒ノアカヌ事ハ此方ニテモラチアカヌモノニ候。

一多忠対曰 藩ノ文学大カタ先ノ代ニ建候マ、宋儒ニ候。近年漢唐沾訓モママヲコリ候ヘドモ、マツハ宋説ニテ行ハレ候。ソノ宋説モ次第候。先以天朝ハ古ヨリ明経道ミナ古訓ニ候。東都ニテハ神祖ノ世、羅山先生ヲ宋説ニ而召ツカハレ候ヨリ、御代々宋儒ヲ御尊信ト申内ニ、学風大カタ博物、文章、礼楽ノ筋ニテ、木下平三郎殿、荒井筑後殿、室新助殿ナド、皆有用ノ君子ニ候。其風ヲマネビ、藩内ノ文学モ皆其通リニ候。乍去田舎ニ候得、物毎遅純ニテ、足下ナドノ了簡ニハ難及学問ノ見モ人驚シ世ヲヒ、カス程ノ事ハ無之候。

一南宮曰 一段ノ御事御国ガラト存候。江戸ナド一向ニ宋儒無之、アルト申ハ皆筆記斗一通リヲサガシ、朱書ナドヨミ不申候。結句世ニタガフルモノハ、百千年眼明張□作ノヤウナル道ニモアタラス、アチナル事ヲ申人ヲタブラカシ候。其御国ナド遅純ナルヤウナル学問、結句手アツク古人ノ風アルベク、オクユカシキ御事奉存候。足下モ文学ノ御組合候哉。何人外ニハ文学ニ御在江戸候哉。

一多冲曰 私儀文学組ニ無之候。武所ノ役一通リト申モノ、其上当分散人ノ列、樗材相応ニ候。文学ハ高橋治平ト申者ツメ居候。代々顯門ニ候。

一多忠問曰 当時江戸ノ詩風南郭ニモ無之候。藩内ナドハ、近年南郭ニ帰シ候。同人ノアツカヒ候者モアマタ有之候。性念寺圓諦、斎藤孝内叔明、新井彦四郎義敬、大内忠兵衛思明、民ニテ菅原新内ナド、申者有之候。皆相応ニ作り申候。其内皆没シ、一兩人存生申候。コレヲ内、大カタ南郭集ニモ名出申候。私ハハチト了簡有之、南郭ト同ジ様ニモ作り不申候。勿論、南郭ハ無類ノ功者、中々難及候。是ヲ似セ候ハ、邯鄲ノ歩ニテ候。足下ノ先日ノ御作ナト珍重至極ナガラ、南郭ト別ニ候。去年中、日本名家詩選ヲヨミ候内ニ、初テ足下ノ詩ヲ読候テ、高風ヲ仰居候。定テ唐明風格御了簡候ヲ承度候。

一南宮対曰 此比ノニ律ヨク候。今拙作ヲ私シタマハリ、不浅景存候。疎懶ニテイマダ御律モ和シ不申候。扱御藩

内、詩モ盛ト申物ニ候。足下モ其人ニナラハレ候哉。

一多忠曰 其人々世ヲ同セルモアリ、又先ダチ候モ有之。何レニ友トシ、遊ヒ候ハ一兩人候ヘ共、前ニ申通、チト了簡有之、左様ノ者ニハ一向ナライ不申候。自荆ニ候。古人ヲ尚友シテ、毛詩三百篇ヨリ、離騷、文選、唐明ノ諸名家ニ随ヒ、詩論、嚴隴浪、胡元陽ナドニ伴ヒ候、此躰ノ稽古ノ筋、徂來ナド委細申承候。其通りニ仕候。

一対曰 ヨキ御了簡、ナマナル先生ニ從ヒテハ結句アシク候。自身古人ニサカノボリシ事至極ニ御座候。私、詩ハ南郭ニモ一向ヨリ不申候。トカク唐明ハ不及申候。宋元トテモ詩理ハ同前ニ候間、何トカキラヒ候ワケモナク候。勿論、詩文ニテ世ニ高フル心モ無之候。私集モ□板ニテ大袂集ト有之候取ヨセ可入御覽候。其上詩文ハ自身ノ□才ニ似セテ作ル事ニ候。師匠ニ似ヨト教ル事アシク候。南郭ナト人を同風ニ斗取立候義チト不心得ニ存候。私ナドハ私風ニテ、足下モ此了簡ト存候。

一多忠曰 自荆ノ方御了簡ニ叶候由、一段ニ候。イニシヘ儒行篇ニ固陋寡聞トテ、自荆ヲニクミ候。但シ是ハ三代礼楽ノ世界ノ義、秦漢以後ハナルホド自荆モヨク候。此境愚慮候ヘ共、事長ク候可候。今日ハ指ヒカヘ候。(以下多忠注記。二行割リ細字)

〔但シ南宮ガ文見不申候。モシ論ハ不可ニ而モ文ハヨキ事モ有之候。老子ニモ言不識、識者不言ト申候ヘバ、言ト行ヒトハ一致ニテ一致ナラヌモノユヘ、ヲシツケテハ申難ク候。同人胸中シヤラクニ候ヘバ、ケツク俗氣無之、文章ハヨキ方ニモ可有欤。此ヤウナル事唐ニテモ大分有ル事ニ御座候。詩文章ノ論愚慮ハ大分南宮ト別段ニ御座候。乍去イタツテ折入ムツカシキ儀、勿論沙汰度シテモ埒明申事ニ無之候故、指扣申候。此義ハ唐日本トモニ代々モシメ合申候。其内自得次第^(マ)ノ義ニ奉存候。南宮詩文ノ沙汰ハ大方龜末ナルモノニ御座候。乍去只今江戸方大カタ此通ニ奉存候。詩文ノ論ハ徂來南郭ニ及、ブモノ無御座候。此ニ家ノ論又兩人ノ了簡ニハ無之候。秦

漢以来古人ノ説ヲヨク見ツメ申候物ニ御座候。先以文章ハ達意修辭ノ兩派、詩ハ唐明ノ二派ニテ事埒明申候。

一多忠曰 文章ハイカ、御沙汰候哉。韓柳王季ノ四家ノ閔ヲ出ルモノ無之、和漢一同ナルモノニ候。私ナド初ハ王李ヲチト修行申候ヘトモ、ムツカシク埒明不申候。今ニテハタハイモナキモノニ候。勿論、韓柳ニモ無之候。今日業平朝臣後孫ナル御門人ヘ送り候小引ノ文ニテシレ申候。至極ノ達意ノミニ候。足下文章不見申候間御尋仕候。

一対曰 私文章ハ先年朝鮮人ヘ応対ノ一冊有之候。書物屋ヨリ取ヨセ、可懸御目候。其節ハ見識定リ不申候。トカク朝鮮人ハ宋儒ニテ答ヘヲ仕候。私文章ハ韓柳ニ從ヒ申候。王季ハムツカシク句ヲナン兼申候。畢竟、李ハ醜文ヲカザリ候為ニ、ワザトムツカシク書候様ニ存候。此間ニモ江戸ノ能耳山人大内仲太夫ナドガ文モ此類ノ尚更ワルキ者ニ御座候。文ハ八大家スラリトシテヨク候。但シ私義文下手ニ御座候。平洲ガ方ヨク書申候。足下文章スラノトヨク候。トカク明文ニ見得申候。

一南宮問 王季ガ外、五子ナドノ学問イカ、御了簡ナサレ候哉。

一多忠曰 季一向ノ無学ニ候。王経術家ニハ無之候ヘ共、大名氣□有之上ニ博物大見識トモ見得候。其上文章至極自在にて史家ノオヲカネ申候。面白キ人物ニ候。残ノ五子ハ文ノ経術モ取所一向ニ無之候。

一南宮曰 李ト五子ハ仰ノ通ニ候。王モ存ノ外ニ候。何トヤラン申明末ノ唐本ヲヨミ候ヘ折見申候。王モ宋学ニ候。トカク理ヲアチラコチラトカザリ候斗ニテ、指タル事無之候。明ノ学風ニ候。衷サセ候ハ実ニ王季ヨリ始リ候様ニ存候。

一多忠曰 此義袁中郎鐘伯敬ナド左様申候。私ハドヲ申候テモ王ハヒイキ分ニ御座候。李ハナルホド偏固ニ候乍、有韻ノ文ハ名人ニ候。

一南宮曰 仰ノ通ニ候。此間モ七子ノ内ニ、謝秦ガ詩第一ナルヨシ太室ガ人ニ逢テ語り候由承候間、□ヲ同人ニ異見

申候

一多忠曰 左様ニ候。但シコレモ太室斗ニ無之候。京ノ龍草芦モ謝泰カ王季ニ勝ルノ論ヲ板シ候由、藩ノ児輩語申候。世ニ有事ト見得申候。大方明末ニ此論有候。

一多忠曰 京ニテハ唯今誰人儒学文章ノ宗師ニ候ヤ。葛阪モ役候由承候。龍艸慮彦根御家中龍門サダメテ宗匠ナルヘク候。イカゞ。

一対曰 此間ハ北海ノ江村綏大分ハヤリ、ヨク御座候。私方ヘモ先年立ヨリ知ル人ニ御座候。トカク京ハ千歳ノ帝王州ニテ、礼楽文物ヨリ、山川ノ佳麗、人物ノ苑藪(淵)ユエヨキ事大分ニ有之候。私イマダシカ西遊不致候。

一問 弊邦田舎ニ候得バ、書ナド無之候。先日平洲ヘモ咄候通、龍宝ト申山ニ藏書有。云廿一史、十三經、說郛、百三家集、丹鉛、讀確、冊府、英華、太平御覽、広記の類ノ善書一通リ有之候。外ニ儒家ナトニモ大抵ノ書ハ有之候。右之外、新渡ノ珍本無之候。詩ニモ唐詩類苑ノ様ナル物ハ有之候。廿一史ナド相ニヨミ候処、遂行尋勺テ吟味スルニモ不及。勿論、晋書マデハ文モヨク候ヘトモ、其下ハ文ミヨムニタラズ候マ、サラ／＼トヨミ下シ候。其内代々ノ刑政、治術、人物ノ様子斗心得候事ニ候。外律歴礼楽兵志ナドハ別段ニ吟味ヲ入申候義ニ候。足下ナド□セラレ様イカゞ候哉。

一対 御邦ノ書物沢山ナル事ニ候。江戸ナド書物存之外無之候。ソレホド蓋ヘ候処モ中々アマタ有之間敷候。廿一史ナドハ其通リニ見テヨク候。制法ノ処ハ心ユルサレズ、シカト目ヲ付候ガ專一ニ候。史論ハ唐ノ刘知幾第一ニ候。扱書物ハアチナルモノニテ、大部ノ書ノ類苑ナド唐類函ノ様ナルモノ存之外役ニ立不ト物ニ候。其内、説部ナドヨキ事アマタ御座候。此類ハヒマナルオリ、眠ヲサマシナガラフラ／＼トヨミ□ヘ候得バ、一生ノ学問才力ヲ大分生ジ申候。足下ナド御少年ノ折御仕合ヨク、ヒモ有之、御ヨミ候由一段ニ候。指アタリ日用ノ書ハ、六經、論語ナト

ノ外無之候。ソノ無益ノヤウナル書ヲ沢山ニヨミ不申候得共、六経一向スミ不申候。当世ノ人ハ早速功ヲ取申事ヲ好ミ、入用ノ書斗ヨミ候故、才氣長ジ不申候。学問日(欠字)□ヲトロヘ候。何ト御学問ハヒロク心得、今日ノ人事ノ用ニ立、ムツカシキ世界ヲモ順ニ取ナラシ候様ニ心懸候事ニ候。私ナドノヤウナルヤクタイ(欠字)□□ニ候ヘ共、諸侯ノ招キニマカセ御政ナド折フシ御相談ノ節申達候筋ナド、万ニ一ハ御用立ヨロシクトリナラサレタル義モ有之候。町家ニモ門人有之候。イタヅラムスコナドヲ亟々トシテ姦ニイタラシメズト申事ヲ申説テナラシ候義モ有之。トカク学問ハフラ／＼スル内ニ功モアル事候。此間モアル□□在ノ諸侯ヘ了簡ヲ申ストテ、君ノ非ヲ格タダハ正シク直諫□□ヨシナド申候。私申候ニハ、格ハ正義ニハ無之、感ノ事ナレバ、思ズシラズニ風化ノアル事ナルベシト申候。実ニ学問ハワケアル事ニテ、メツタニスレバアシク候。(欠字)□□□□□□

〔頭注。多冲ナラン〕

劉知幾、字子玄、唐書ニ伝アリ、史論ノ名人ニ御座候、史ヲ作ル事ハ下手ニ御座候。

一多忠曰 ヨク御工夫ニ実ニ俗儒及難ク候。御高見トニテ、大分得ヲ致シ候。御胸中俗氣無之候間ソレヨリ導カレ候ハ、自然ト人モ合点可申候。仰ノ如ク中々急ニ学問ハナリ不申候。実ニ千載ノ子雲ノマツ由、楊雄ガ申候。承候通、不朽ノ業ユヘ、氣短ニテハナリ不申候。今日ハ夜深クナリ候可候。此次ニ龍ヲヨチ、又御切磋ヲ得ベク候。御著述モ追々ニ見可申候由申候。初日今日共ニ殊ノ外馳走ト寧ニテ、御長屋ヘモ秋氣生ジ候ハ、余リ詩ヲ可仕由申候故、必名公トモヲ誘引参候様ニ申合候而、罷帰申候。以上

六月五日夜 南宮弥六郎大湫ト (以下破損脱字)

〔補記・国字著作編〕その後、次の資料が管見に入った。

両吟千句 写一冊。仙台市民図書館蔵。縦一三・五センチ、横一九・一センチの横本。袋綴で、表紙は布目に雲母で雲型を捺す。外題は打つ付け書きで、中央に「両吟千句」、同筆でその左に「寛延 一卷／平元建得／宝曆 一卷／同盛雄」とあり、左肩に異筆で「盛雄初学千句」とある。本文料紙は楮紙で、墨付八一丁、寛延千句と宝曆千句の間に一丁、巻末奥書の前に一丁の遊紙を置く。寛延千句の端作りは「寛延四年六月両吟／盛雄初学千句」とあり、行年十九歳一花 何船、第二花 何路、第三花 御何、第四時鳥 二字反音、第五子規 千何、第六月 三字中略、第七月 唐何、第八月 何風、第九雪 玉何、第十雪 何鳥の十種の百韻で、それぞれ父建得五十句盛雄五十句より成る。最後に一丁置いて「追加／兼誼／咲花やこころ筑波の道指南」が記されている。宝曆千句の端作りは「宝曆三年九月朕日／両吟千句」とあり、第一梅 何路、第二梅 山何、第三梅 花何、第四納涼 何屋、第五納涼 何草、第六月 何鳥、第七月 一字露頭、第八月 千何、第九雪 三字中略、第十雪 下何の十種の百韻、これも建得、盛雄各五十句より成っている。構成から、両千吟が姉妹編の催だったことが推測される。巻末識語は「右畑中淡也多忠両先生両吟千句自筆於店頭求之、不堪恐喜子孫永可重宝之者也／明治十八年岡将舒(花押)」とある。巻頭に「岡氏／蔵書」の二行朱方印が捺されている。岡千仞の甥に当る岡将舒(濯)が購入した本で、識語には(盛雄)自筆とあるが、前記端作りに「行年十九歳」とあるのが十八歳の誤りであり、転写本と見做すべきかと思われる。

寛延四年六月初学千句の第一百韻「何船」の巻頭三句。

一花を園の文事のはしめ哉 建得

門ひろこれる折を得し春 盛雄

立つく霞の籬奥ありて

宝曆三年九月朔日千句の第一百韻「何路」の巻頭。

咲て世に梅を曆や神の春 建得

のとけさつくる宮のうくひす 盛雄

朝霞匂ふ方より日は出て 同

奥海和歌集・続奥海和歌集 写八冊。仙台市民図書館蔵(巻一欠)。伊達藩士鈴木親敬が慶応元年(三年)にかけて、江戸初期以来の伊達藩歌壇の詠作を撰集したもの。正集二十卷千六百十七首、続集二十卷三千三百三十首。大日本歌書綜覧に見えるが散佚したと見られていた。撰者から伊達家への献上本を明治二七年に岡将舒が転写していた本が現存。盛雄の歌も多数入集するし、何と畑中健得・盛雄父子の歌のみの抄出本も現存するが該本の精査が現段階ではできないので伝本存在の報告にとどめる。